論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（学　　術）	氏名	NURIA　HARISTIANI
学位授与の要件	学位規則第４条第①・２項該当		

論　文　題　目

日本語とインドネシア語の謝罪行動の対照研究

論文審査担当者

主　　査	教　授	町　　博　　光
審査委員	教　授	酒　　井　　弘
審査委員	教　授	白　　川　　博　　之
審査委員	教　授	高　　永　　茂　（文学研究科）

〔論文審査の要旨〕

人は相手に損害を与えたり、不快な思いをさせた場合、その状況を適正なものにしようと「修復行動」（remedial work）を行う。Barnlund ＆ Yoshioka によると、純粋な謝罪には、（ａ）他人を傷つけたと気づき、（ｂ）その損失や傷に対して責任があると意識し、（ｃ）自覚をすることが義務と認識することが必要だとしている。このような条件がそろったところで謝罪行動がおこなわれる。

従来の謝罪行動の研究では、謝罪ストラテジーと謝罪定型表現に関するものがほとんどで、謝罪意識を取り上げている研究は少ない。また、謝罪行動を取り上げているにしても、謝罪する側の言語行動のみを取り上げ、相互行為としての謝罪行動を取り上げたものは少ない。

本研究は、日本語とインドネシア語の謝罪行動を、謝罪場面における謝罪する側および謝罪を受ける側の言語行動を観察し、双方の言語行動を相互行為の観点から分析し、両言語における謝罪のやりとりに関する類似点と相違点を明らかにしていったものである。

第１章では、研究の目的と方法について述べている。

第２章では、謝罪に関するこれまでの研究を整理している。謝罪についての研究を、（１）謝罪意識の研究、（２）謝罪行動の研究、（３）フェイス概念に関する研究に分けて概観している。

第３章では、日本語とインドネシア語の謝罪意識を比較した。「謝罪意識」・「罪悪感」・「迷惑度合い」の３意識を主な対象として調査した。調査項目の中に、実際の謝罪行動の中で、日本人が好まないとされる「説明」も加えている。意識調査の結果からは、日本語とインドネシア語ともに、自分に対する罪悪感の方が、相手に対する賠償意識よりも強いことが明らかになった。相違点としては、インドネシア語の方が日本語よりも相手に求める度合いが強い傾向が認められた。

第４章では、日本語とインドネシア語における「謝罪者」と「被謝罪者」の言語行動を、具体的な会話資料に基づいて分析している。資料は、日本語とインドネシア語の男女それぞれ１０組のペアを作り、ロールプレイ調査で収集し、同時に意識調査も実施している。それらの会話資料を、意味公式によって分類していった。その結果、最も多く使用される意味公式は、日本語では「明確な謝罪表明」であり、インドネシア語では「説明」であった。「過失修復の試

み」は両言語ともに多かったが、その内容に差が認められた。すなわち、相手の過失を修復するために、日本語では、代償を提供する、または代償の要求を受け入れることが多用される。いっぽうのインドネシア語では、「相手の攻撃弱化」や「相手配慮」など様々なストラテジーを用いて修復を試みていることが明らかとなった。

第５章では、謝罪会話を【開始部】【中心部】【終結部】に分けて分析している。【開始部】では、両言語ともに挨拶行動が見られる。日本語では、挨拶行動として、「注意喚起表現」が、インドネシア語では「呼称」と「相手の行動に関する問答」が挨拶行動として用いられている。「呼称」を多用するのは、呼称が、相手を気にしている（敬っている）との信号を送ることで、ポライトネスの重要な要素になっていることを指摘している。【中心部】では、「明確な謝罪表明」と「譲歩」の使用位置から両言語を比較した。会話が開始されてすぐに謝罪表明が行われるのは両言語ともに共通している。日本語ではそれを受けてすぐに「譲歩」がおこなわれるのに対し、インドネシア語ではすぐに許すことは少なく、会話の最後に「譲歩」が明示されている。インドネシア語では、謝罪を受け入れるまでに、さまざまのストラテジーを用いていることが明らかとなった。【終結部】では、両言語ともに類似した傾向を示している。すなわち、話題転換がおこなわれることによって謝罪会話が終了することが最も多く、「謝罪者」と「被謝罪者」の間で了解が交わされた時点で会話が終了することが多い。

第６章では、本論文の結論を述べる。日本語とインドネシア語の謝罪行動ではどのようにフェイス維持がおこなわれているのか、謝罪意識と謝罪行動はどのような関連を見せるのかについてまとめている。また、日本語教育への示唆と今後の課題も合わせて述べている。

本研究は、以下の３点において特色を認めることができる。

１．日本語とインドネシア語の謝罪意識を明らかにした。また、謝罪する側の意識のみでなく、謝罪される側の意識も探り、双方の意識の差がかなり異なっていることを明らかにした。さらに、謝罪意識と謝罪行動の関連も明らかにした。

２．日本語とインドネシア語の謝罪行動を明らかにするために、謝罪する側と謝罪される側の双方の言語行動を会話資料に基づいて具体的に分析した。分析の際には、「意味公式」を用いて会話を構造化し、全体の流れが把握できるように試みた。

３．謝罪をフェイスの問題として考え、謝罪行動が、相手のフェイスを尊重すると同時に、自分のフェイスを損なうことになる相互行為であることを指摘し、日本語とインドネシア語におけるフェイス維持の方略を比較考察した。

以上、審査の結果、本論文の著者は、博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成２６年２月１０日